



黄河の森

K F G

発行／特定非営利活動法人
黄河の森緑化ネットワーク
代表理事／金 啓 功
編集責任者／小 川 良 太
〒650-0011
神戸市中央区下山手通7-11-12
福建同郷会館内
TEL／FAX 078-360-2779
E-mail:mail@kouganomori.com
URL: http://kouganomori.com



「Ⅱ地区の最初の花 3月に植えたアジサイが咲きました」



ああ あの大河 太古より 流れる誇り
ああ その緑 永久に たやさぬ心
燃えたつ生命 ここに ここに

CONTENTS

- P.2 第22回 通常総会報告
住吉山手植樹活動 記
六甲山クリーン＆グリーン活動
- P.3 「森の世話人ミーティング2025」に参加して
絵本からのメッセージ ④
- P.4 誌上「歴史散歩③」
小犬丸遺跡

第22回通常総会の報告 今年の活動は国内活動を中心に

5月31日神戸市内の中華会館にて第22回通常総会を開催しました。会議では令和6年度事業の報告・活動経費決算・監査報告書と、新年度事業・活動経費案を審議の結果原案通り承認をいただきました。今回は役員人事の改選期ではありませんが、長年理事・監事として活動いただいたお二方から、健康上の事情から辞任のお申し出がありました。健康の問題でもあり、皆様からご承認いただきました。お二方には長年のご尽力に感謝申し上げます。なお、新たにお一人に理事に就任していただくことになりました。

昨年度の中国植樹事業については、日中友好会館の助成金事業が廃止されました。これに代わる資金の手当てもできなかったため実施は断念しました。今年も事業再開の見通しは立っておりません。また、現状の国際・社

会情勢下では事業再開は困難と判断しております。当面は国内植樹活動に注力することにしました。

国内活動においては平成17年より長年にわたって行ってきた、六甲山住吉山手での植樹・下草刈り作業など「森づくり」植樹活動を継続しました。これまでの20年余の植樹で、同地での植樹可能域は少なくなりました。そこで昨年「森の世話人事務局」より斡旋をいただいた、これまでの事業地（Ⅰ区）の隣接地（Ⅱ区事業地）での植樹活動を主とすることにしました。今後もこれまで実施してきた事業地についても、枯れた苗に代わる捕植・雑草取り・根笹の除去作業等は継続して行います。

審議においては、長年の課題である会員数の減少・活動の活発化についても議論がありましたが、解決案の検討には至っておりません。

住吉山手植樹活動 記

今活動を行っている植樹基地は、本誌41号で地形学者の高橋学さんも以下のように指摘されておられる山系の中に位置しています。「六甲山地はまるで砂山であるかのような風化した花こう岩でできており、(中略)大雨が降ると土石流を引き起こしやすい …。」と今の事業地はまさしく砂防ダムの中です。

住吉山手では原則年3回の活動を行っております。初めに苗木の植え付け適期とされる春先の3月初旬、2・3回目は6月と10月に苗木周囲の雑草取りを実施しています。その他、添え木の取り換え・補植も適宜行っています。特にここ数年の夏の酷暑・寡雨など極端な気候のもとでは気が抜けない状態が続いています。この定期活動の間も折を見て木々の様子を観察に行っております。

現地では訪れるたびに季節の変化をはじめとして、植物の生長を感じる事が多くあります。ハイキングコースからは外れているためか、特に春の活動の際は鳥の鳴き声を耳にすることも多く、6月には蝶の姿もよく目にすることができます。現在話題の獣害についてはここでは特段の被害はありませんが、毎回水辺にはイノシシが訪れている痕跡が残っています。数多くの足跡と、集積しておいた枯れ枝・刈り草などが散らかされ、地面が掘り返された跡が残っています。「ヌタ場」も2か所で確認できます。その他、小動物のものと思われる糞を見かけることもあります。当地は住宅街にほど近い場所ですが、多くの生物が活動していることを窺わせます。

この夏も異常な高温と度重なる集中豪雨が頻発し、農産物の収量にも大きな影響を及ぼすことが懸念されるよ

うになりました。気候変動がより毎日の生活に対して切実な問題となってきました。昨年10月の活動の際に彼岸花を見て、約半月も遅い時期にと驚き、改めて気候の変動を感じたことがありました。

当地の東の谷筋一住吉川上流地一では、近世まで酒米の精米・綿花・菜種の採油にと稼働していた水車遺構群を保存する「水車の森」の整備事業も昨年から始まっているようです。このように一帯では植物だけでなく文化財・動物・地形(断層地形)など環境を観察できる素材が多くある場所です。

会でも植樹地の将来は、どのような形にできるのか会議のたびに話題にしていますが妙案の浮かばない状況です。しかし「人々が気軽に訪れ、植物や昆虫を含め自然を観察できる憩いの場」になればとは考えております。



← 順調に活着した苗



← 夏場の草取り



← 昨年の季節外れの彼岸花



← 斜面では土砂の流失も

六甲山クリーン&グリーン活動



六甲山植樹 (捕植・下草刈り)

- 開催日時 令和7年10月4日(土)
- 集合 J R住吉駅南広場 (午前9時)
- 服装 長袖・帽子・運動靴
- 持参品 弁当・飲み水・軍手・タオル



※ 現在マダニの発生が全国で伝えられています。参加に当たっては手・足の肌の露出がしない服装をご用意ください。

【お詫びと訂正】

前号の「会費・緑化支援金等協力者のお名前」欄で(一財法)三江会館様のお名前が記載できておりませんでした。お詫び・訂正をいたします。

「森の世話人ミーティング 2025」に参加して 六甲山系の森林ボランティア団体の交流会

8月26日神戸市中央区で開催された、国交省六甲砂防事務所・森の世話人事務局の主催による表記の交流会に参加し、砂防事務所の事業方針・事業内容と。併せて参加他団体の実践経験・状況を知る機会を得ました。ミーティングでは最初に砂防事務所より事業の開始から経緯・目標を、株式会社KANSOテクノスから六甲山の林相についての解説があり、その後団体間の意見交換が行われました。

神戸市含む阪神間では市街地の拡大が六甲山系の傾斜地に急速に向かい、土砂災害の危険が増加していました。そこへ1995年の阪神・淡路大震災により多数の山腹崩壊が発生しました。この事態により翌年「六甲山系グリーンベルト整備基本方針」が設定され、事業が動き出しました。事業の対象地域は神戸市須磨区から宝塚市に渡る南側の斜面です。事業はⅠ崩壊あるいは崩壊が予測される区域・Ⅱ樹林は概ね樹林が形成されているが目標とする樹林へ誘導する区域・Ⅲ樹林が形成されているが災害防止の観点から適正な整備を行う3区域に分け実施されています。活動を希望するボランティア団体は、「森の世話人」の名で砂防事務所に登録し活動に参加します。市民ボランティアの参加するのは事業地区分Ⅱの区域です。KFGはこの事業

に2005年より参加して住吉山手で活動を継続しています。

次に、現在の六甲山の林相の概略の解説が行われました。ボランティア団体が活動するⅡ事業地は「ニセアカシア群落」・「スズキ・ネザサ群落」・「スギ・ヒノキ群落」・「モウソウチク・マダケ群落」に区分され、それぞれの群落の林相に応じた伐採方法・植栽苗の選定が必要とのことでした。中でもニセアカシア・ネザサは植樹種の成長に悪影響を及ぼすため刈り取りが重要になるとのことでした。住吉山手の事業地では幸いなことに、ニセアカシア・ネザサは当初からほとんど見かけませんでしたが、最近ネザサの侵入が見られ、近い時期には刈り取りが必要になるものと考えております。林内にネザサ類が繁茂すると林床の多様性が低下し、良好な林相の形成に悪影響するとのことでした。

グリーンベルト事業の森は「落葉広葉樹と針広混交林」を目指しているとのことでした。現在森の世話人として登録している団体数は市民団体23団体・企業21団体に上り、これまでの約20年間に延べ40,000人が参加し13haに約13,000本の苗を植えたそうです。

今回ミーティングでは19団体・36人が、①参加者を増やす方法②参加者の満足度を高める方法③事故防止

の工夫④運営面の工夫等を共通テーマとして意見交換を行いました。どのテーマも日頃の活動の中で最も悩ましく、解決のつかない問題です。

①の参加者を増やす方法についても、SNSで参加者を募る・知人達を勧誘するなどが披露されましたが、どれも効果は限定的であったようです。また参加者を増やすとともに、事業の継承方法についても発言がありました。短い時間内でもあり各テーマ共に議論は深まりませんでした。

グリーンベルト事業の目標の一つとしての「健全なレクリエーションの場」の提供については、小学生による環境学習として「ドングリ育成」プログラムが取り組まれています。これに取り組む団体の登録も増加しているようです。今年度は神戸市内の小学校4校が実施する予定とされています。

最後は筆者個人としての感想です。ボランティア活動は無理して続ける必要はなく、事業継承は出来れば好いが、だめなら止めるぐらいの気持ちでやればいい。運営経費の軽減策として傷害保険費用についても意見が出ました。筆者が住んでいる市では年2回の市内美化運動を行っているが、保険は市が加入しています。緑化運動も神戸市の市民運動として取り上げられれば、保険の負担は公費で負担でき団体の負担も少しは軽減できるのではと考えています。

会員 谷川清隆・小川良太

絵本からの メッセージ 40

「せんろはつづく」

児童文学者 畑中弘子

「せんろはつづく」は子供の大好きな鉄道の物語です。子供だけでなく、大人も鉄道の“線路”や“鉄橋”や“トンネル”と聞くと、なぜか心が動きます。家から離れて遠くへ行く、非日常を連想するからかもしれません。

絵本の中の子供たちは、公園で板切れを見つけました。「これなーんだ」「せんろだよ」。それから「ごっこ遊び」が始まります。木切れで線路をつないで、野原を越えると、山にあたりました。「どうする?」「あなを ほろう トンネルだ」。川があると、「はしをかけよう てっきょうだ」。道には踏切をつくります。どんどんつなぐと、どんどん線路は長くなっていきました。とうとう公園を一周する線路の出来上がりです。「つながった!」「ここにえきをつくらう」。

みんなを乗せて、列車は走ります。リズムカルな言葉がますます子供の心をわくわくさせます。絵も子どもたちの夢の通りに本物そっくり、いえ、それ以上に楽しく描かれた美しい絵本です。



文：竹下文子

絵：鈴木まもる
(金の星社)

誌上「歴史散歩③」

小犬丸遺跡 (たつの市揖西町小犬丸)

— 古代山陽道「布施駅家(うまや)跡」—

会 員

小 川 良 太

1. 小犬丸遺跡

たつの市を東西に横断する県道姫路上郡線が、市街地を西に抜けた丘陵麓にある小犬丸遺跡は、戦前から古代瓦が採集され寺院跡とされてきました。その後、研究が進み「駅家」跡ではと推定されるに至りました。1986年、県道の改修工事に伴う発掘調査で「驛」・「布施井邊家」と墨書された土器が出土し、古代山陽道の「布施駅」跡であることが明らかになりました。その後の一連の調査で丘陵南麓と県道の間、ほぼ80m四方の瓦葺築地堀に囲まれた7棟の瓦葺礎石建物が発見された。出土した瓦の一部には丹が付着し、同時に白色の土塊も出土しています。『日本後紀』に「瓦葺粉壁(瓦葺白壁)」と記された、瓦葺・朱塗り柱・白壁造りの華麗な駅館の具体的な姿を復元することができます。現在の県道は古代山陽道と重なっていることも判明しました。この調査成果は駅家の具体的な姿が判明した、全国で初めての例となりました。

ここ「布施駅」は8世紀頃から11世紀にかけて存続しましたが、その後の様相は記録もなく明らかではありません。しかし「小犬丸」地名からその後の姿を推測することができました。

2. 古代の幹線道路と駅家

飛鳥時代の朝廷が唐に倣って取り入れた律令制度に基づく中央集権化の結果、地方にも朝廷により直接支配することになりました。そのためには「人・物・情報」の速やかな伝達が必要となります。こうした構想のもと、全国の幹線道路整備と設置された施設が駅家であり、早馬の仕組みでした。中でも山陽道は九州の大宰府、その先の大陸・朝鮮半島を視野に入れた最重要の道路でした。駅馬は原則30里(約16km)ごとに設置され、「早馬」を乗り継ぐための替え馬が用意されていました。因みに当地では20匹用意されていました。また駅館は大陸からの使者の迎賓館・公務の旅人の宿泊・休息場所でもありました。維持・運営するためには地元有力者を駅長にあて、そのも

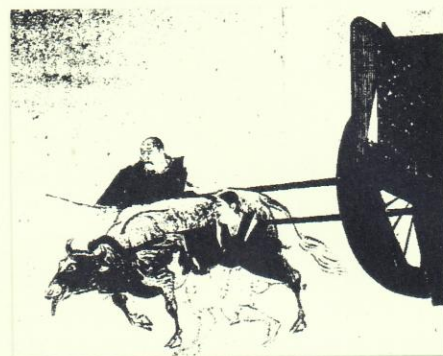
とに駅戸が配置されました。また、戦時の際には駅馬を軍馬として、輜重車用の牛も用意されていたとの研究もあります。平安時代も半ばになり古代律令制度が弛緩し11世紀以降、多くの駅家は廃絶または、国家機関としての機能は失われたと考えられます。それは出土品の年代からも推測されます。しかし、この運輸・交通の仕組みは時代の変化と共に重要性は増し、新たな担い手を生み出しました。

3. 小犬丸と牛飼童(わらわ)

平安時代の絵巻物に貴人が乗っている牛車の引き綱を引いている、蓬髪姿の人物が描かれています。彼らは牛の飼育・世話を職能として、貴人に雇われている「牛飼童」と呼ばれる人です。この人たちは成人でありながら、その髪形は童姿を表しています。この人達は「丸」という幼名を名乗っていました。「丸」幼名は身分の上下にかかわらず成人になるまで名乗りますが、この人たちはその職能ゆえに成人後も自ら「丸」と名乗っていました。「犬丸・小犬丸」もその中の一つです。平安時代に「小犬丸」なる人物が京の三条で牛車による材木の運搬中に、諍いに巻き込まれ検非違使により捕縛・投獄され、妻が赦免を願い出た文書が残されています。この例の示すところは、主家の下での仕事の無いときには、その飼育をしている牛・車で運送業を営んでいたことを示しています。平安時代も後期になると荷駄による「馬借」、牛車による「車借」という運送業者が現れてきます。朝廷による駅制は11世紀以降に崩壊しますが、朝廷の公領あるいは、権門の全国の荘園からの米その他の貢納品と共に、経済の発展による物資の輸送が活発化します。こうして古代国家により開始された仕組みは新たな役割を増していきました。

4. 贅沢な暮らしをする車借・馬借

2009年茨城県日立市十王町の「長者岡」遺跡は発掘調査の結果、常陸国の「藻借島(めしま)」駅であることが明らかになりました。報告書によると当地には長者屋敷跡との伝説



「二人の牛飼童の姿」
『平治物語絵』より

が伝えられていました。茨城・栃木・群馬県などの東国では「長者」・「長者屋敷」と称する遺跡があります。駅家・郡衙跡あるいはそれらの「長」の屋敷跡かとされていますが、十分な調査は進んでいません。一方、長者には「富裕者」の意もあります。11世紀に著された『新猿楽記』は架空の貴族一家を通して見た、当時の世相・風俗などを描写した物語です。某貴族の娘は「食飯愛酒の女也」とされ、それ故「馬借・車借の妻と為らんと願ふ」に至ります。このように「馬借・車借」の富裕ぶりは、当時ではよく知られた存在だったようです。

5. 「小犬丸」地名の由来

「布施駅」の地は駅家以来の交通・輸送の拠点としての機能は残り、それを引き継ぎ牛・馬の扱いを熟知した「小犬丸」と名乗る人が出現し、運輸業を営みその富裕ぶりは当地の人々に強い印象を与えたのでしょう。それ故に、永く名が伝えられることになったと考えられます。

※「小犬丸」地名の由来については先学により考察されていますが、明確な結論は得られていません。

※「布施駅」延喜式(平安時代の法令集)に全国の駅名が記載されている。

※牛飼童については「日本の歴史をよみなおす」網野善彦著 筑摩書房1991
「庶民たちの平安京」繁田信一著 角川学芸出版2008を参照しました。